

社会思想史学会第 50 回大会セッション D

「自然と社会の領域を再考する：生態学と思想史の対話」

本セッションは、近年の地質学的時代区分の動向を視野に入れて自然と人間社会の領域を再考するために、アメリカの数理生態学者であると同時に、弁証法的唯物論の観点に立つ社会科学的論考をも長年にわたり発表してきたリチャード・レヴィンズ Levins, Richard (1930- 2016、NY 生)の思想を軸に、生態学と思想史の対話を試みたものである。

はじめに世話人からイントロダクションを提示した。近代社会思想史において自然と人間社会の関係は繰り返し問われてきたが、そこでは自然が固定的に、また「資源」については所与のものとして捉えられてきたことを説明し、ただし経済思想史においては「経済」概念を両者の代謝関係として広くとらえる系譜もあったことを付け加え、その後にレヴィンズの仕事や経歴について簡略に説明した。

次に第一報告として平田周会員が「プラネタリー・アーバニゼーション研究と R.レヴィンズの弁証法的全体論との共振関係について」と題する報告を行った。平田会員は自身の専門領域であるアンリ・ルフェーブル、ニール・ブレナーの都市論を簡略に紹介しながら「都市は外部なしにありえない」というテーゼ、都市における高密度の都市化とその外部に展開する広範囲の都市化のコントラストを提示した後に、1) プラネタリー・アーバニゼーションにおけるヒンターランドの位置、2) 広範囲の都市化から Covid-19 を扱った論文“Between the colossal and the catastrophic” (2022) における Levins への参照という報告の構成を示した。1) はカナダ・アルバータ州のオイルサンド開発の事例の写真に沿った説明であり、2) ではブレナーによるレヴィンズへの参照を手がかりとしてその思想の系譜——ロブ・ウォーラス——とその現代的意義を考察した。平田氏は「巨大なものと破壊的なもののあいだ」というテーマの下で、特に開発と感染症に焦点をあてながら、レヴィンズの自然と社会の関係を検討した。「私たちが自然と私たちの関係を変化させると、私たちはまた疫学と感染が生じる機会をも変化させているのである（中略）従来の公衆衛生は、世界史に、その他の種に、進化と生態系に、最後に社会科学に着目し損なっている」(Levins 2008: 98, 102-103) との言説を出発点としながら、還元論、弁証法、全体論という区分を踏まえ、最後にプラネタリー・アーバニゼーションと新興感染症との関係から、ヒンターランドを考察する重要性をあらためて強調し、報告を締めくくった。

次に第二報告としてゲストの宮下直氏（日本生態学会前会長）から、本セッションのタイトルを冠した報告が行われた。宮下氏もまず自身の専門領域について簡略に説明を行った後、1) 人新世（資本新世）における自然環境の激変、2) Levins と生態学、3) Levins の「自然と社会の弁証法」、4) 農業と感染症への含意という構成を提示した。1) では 1950 年頃からの「大加速」時代における社会経済と地球環境の激変を確認し、その中で自然の恵み、生態系サービスと科学技術、経済誘導の三つの要素の相互関係を考えつつ、「生態系サービスを超える」、「テクノクラートを超える」思想や哲学からの社会変革が必要であることを強調

した。ここから 2)、3) のテーマが導かれる。レヴィンズはメタ個体群理論の創始者であるが、環境からの影響評価に社会階級の要因を組み込むなど社会との関係の考察が不可欠であるとした。かれの自然と社会弁証法は、工学的なシステム理論と同じく、還元論と全体論を両極に置いた中間部に位置するが、システム理論とも異なっている。弁証法では、歴史的矛盾や偶然性などシステム上「外部」とされる要因も含めて、相互浸透や相互決定や定性的分析を重視する方法論的二元論に立つからである。最後に 4) では弁証法的分析の事例として、農業におけるポリカルチャー、感染症の問題が公衆衛生だけでなく社会経済的階層化でもあることの説明がなされた。

コメントーターは世話人の中山がつとめた。いずれの報告も従来の社会思想史研究にとってはやや馴染が薄く難しい内容であったと考え、いくつかの質問により個別論点を掘り下げた。結果的には平田会員から提出された配布資料にあるブレナーによるレヴィンズ理解、都市の代謝活動の概念、さらには宮下氏の言及した「要素がゆるく結合する」レジリエンスの重要性などを、より詳細に確認することができた。

ここでフロアに議論を開き、いくつかの質問やコメントが出された。質問には「そもそも、このような議論の中で人間とはどのように定義され、位置付けられるのか」といった根本的なものから、思想史の中での社会進化論との位置関係を問うもの、人文知や社会科学に過剰な期待を寄せるこへのリスクを指摘するものなど多岐にわたり、たいへん活発な議論が交わされた。セッション参加人数は初日の朝第一セッションであったこともあり 17 名程度であったが、積極的な参加者が多く充実したセッションとなった。